

石川淳選集

第九卷

石川淳選集 第9巻 (全17巻)

1980年7月7日 第1刷発行 ©

¥ 1300

著 者 ^{いし}石 ^{かわ}川 ^{じゅん}淳

発 行 者 緑 川 亨

〒101 東京都千代田区一ツ橋 2-5-5
発 行 所 株式会社 岩 波 書 店

電話 03-265-4111
振替 東京 6-26240

印刷・精興社 製本・牧製本

落丁本・乱丁本はお取替いたします

目次

かくしごと	五
怪異石佛供養	一五
狐の生肝	三五
獅子のファルス	六三
裸婦變相	七三
大徳寺	九九
喜壽童女	一二三
死後の花嫁	一三九
ばけの皮	一四九

越天樂

一五

二人權兵衛

一六

金 鷄

一八

ゆう女始末

一九

靴みがきの一日

二三

鸚鵡石

二四

無 明

二六

鏡の中

二七

一 露

二八

若 菜

三〇

虎の國

三一

小
說
九

かくしごと

寛永のころ、江戸の淺草藏前に、苗字は何とも知れず、五郎左といふ浪人がひとりわびしく住んでゐた。

浪人。府内どこに行つても犬のくそほどにころがつてゐるものことなんぞを、たれも頭痛にやむひまはない。馬の骨の素姓來歴のごときは、他人にとつて無きにひとしかつた。いや、當人ですら越し方行末をおぼえぬけしきで、冬日向に寝ころびながら、近所となり念佛五郎左とささやかれるにまかせた。この男、をりをりのくちぐせに、南無……といふ。ひとりごとにも、ついそれが出た。しかし、南無のあとにすぐ阿彌陀佛とはつづかず、口をもぐもぐさせて、ぐつとのとの奥に吞みこむやうであつた。そのあだ名の念佛さへまんぞくには唱へかねるくらゐだから、もとより無口、

しかもずぬけた大男の、つらがまへ尋常ならず見えたので、ひと附合のよいはずはなかつたが、ただ見かけとちがつて立居しほらしく、どうやら無害らしいところ、ろが愛嬌になつて、うしろ指をさされるとか、毛ぎらひされるとかいふこともなかつた。

この五郎左、あるとき駒形河岸をあるいてゐると、向うから來かかつた五人づれ、これも浪人ながら、ばか長い刀をさしほらして、大手をふつた伊達風俗は、當時はやりのカブキモノ、いづれも事を好む荒くれ仲間と知れた。袖すりあつただけでも喧嘩のきつかけ、五人すぐにも刀を抜きかけて、五郎左を中にとりこめる。まはりに、たちまち彌次馬が遠巻きにあつまつた。その真中に立つて、大男、まづ、まづ、まづ……と、ことば低く、両手でおよぐやうなかたちをしたのは、平あやまりにあやまつてゐるものとしか見えなかつたが、しかしその手のあたるところ、目にもとまらず、

五人の肱を打ち、刀の柄がしらを打つて、つひにこれを抜かせなかつた。荒くれのかしら分らしいのが、さすがに手練をさとつたか、にはかにことばを柔げて、仲直りの酒にさそふ。五郎左、これにもいやといはず、のそのそ引かれて行つたさきは、うまれてはじめての廓といふところ。その酒盛の席に、遊女と語らふでもなく、さかづきもさのみ重ねずに、大男ひとり隅にしりぞいて、ありあはせの紙に矢立の筆でなにやら書きつけてゐる。なにごとかと問へば、答へるやうは、あまりの手持無沙汰に、刀の鞘の禿げたことをおもひ出して、鞘師に注文を書いてゐるといふ。一座みな笑ひこけて、花の山に入りながら手も出さぬのかと、大男をしり目にかけて、なほも酒のみ、女にたはける。揚句のはてに、勘定はすべて五郎左に負はされて、ふところをはたいても不足の分は、鞘の注文どころか、脇差の目貫をはづし、鐔まではづした。

このうはさが藏前までつたはると、近所となり一統あきれて、さても、見かけだふしのウドの大木にもせよ、いくぶんは豪傑の氣味もあるかと、せつかく今まで買ひかぶつてゐてやつたのに、喧嘩は平あやまり、おまけにひとのあそびの勘定までしよひこみとは、よくよくの臆病者、これでは高祿出して召抱へる大名はあるまいと、よそながら不憫がつて、笑ひぐさにした。

さて、歳晚せまつて、ある夜のこと、浪宅はゆたかでもなく、むさくるしくもなく、五郎左は爐端にひとり坐して、菜の粥を煮てゐた。外は星のこごえる寒さなのに、土鍋はふつふつと音をたてて沸きかかった。すると、遠くからざわめきがきこえて來た。耳をすませるにもおよばず、ののしる聲、みだれる足音は次第に近づき、一きはさうざうしく家の表を駆け過ぎたかとおもふと、つい引きかへして來て、二度三度、闇の中に渦を卷いたのちは、またも遠くにうすれて行つた。

そのとき、裏口にかたりと音がして、締まりのしてない戸があいた。そこに、抜刀白く冴えて、ひげづらの男が立つてゐた。

五郎左は吹きあがる土鍋のふたをしづかに切つて、「追はれて來たものか。」

男はつかつかと踏んこんで、爐端に立ちはだかつたまま、

「しづかにしろ。さわぐと斬る。」

「おまへこそ、まづ下にをれ。」

ぢろりと、鼻のさきの白刃を見て、

「ひとを斬つて來たものではないな。」

刀身に血の色はとどめてゐなかつた。五郎左の目の下に、男は刀を鞘にをさめて、そこに坐した。

「じつは、ばくちの上の喧嘩にて、刀を振りまはして逃げたが、おほぜいに追ひつめられた。」

「ここに逃げこんで何とする。」

「しばらくひそんで、やうすを見る。追手が散つたら、出ても行かう。」

「血を見なかつたのは重疊。」

ぽつりと吐き出していふと、五郎左はもうそこにゐる男のひげづらに目もくれないやうであつた。男のはうでは、爐端に置いた身がぬくもるにつれて、かへつてそはそはして、はじめのいきほひに似ず、尻のおちつかぬけはひと見えた。外の闇はひつそりしづまつてゐた。そして、危険はすでに去つたかとおもはれたとき、またしても、闇の底におもく、道を踏みつけて行く足音がきこえた。ただし、今度はその足音に氣合が抜けてゐた。遠くまで追ひかけて行つたものどもが、敵を見うしなつて、おそらく見きりをつけて、ぽつりぽつりもどつて來たにちがひなかつた。それでも、男はあからさまに狼狽の色をうかべて、膝を立てかけた。

「よし。」

五郎左は土鍋を爐のふちに移して、かういつた。

「窮したとあらば、かくまはう。」

そして、燃える火に灰をかぶせておいて、ついと立つと、刀をつかんで、ひとり外に出て行つた。のこされた男はとぼつとして、腰が抜けたやうにうごかなかつた。

五郎左、闇の中に、大音あげて呼ばはるには、

「めんめんにも申す。さがす敵はここにをるぞ。おれがかくまつた。おれが相手になる。かくいふは、さきごろ斷絶したもとの福島しんの家中に、進五郎左衛門しんと きこえたものだ。うまれついて、かくしごとは知らず、ウソいつはりはいつたことが無い。またいかなるときにも、敵にうしろを見せたことが無い。ただし、尋常の武功とおもふな。ひとを殺し首とつて手柄とするものとはちがふ。かの關ヶ原の合戦には、二間柄大身の槍の、穂の長さ一尺、赤さびにさびたるをもつて、こ

れを血にけがすことなく、むらがる石田勢を防ぎとめ追ひちらした。また大坂のいくさのあと、江戸にのぼる道中に、左衛門大夫殿は故主の豊臣に弓を引いたとあつて、評判きはめてよろしからず、宿場の女ども馬子のたぐひに至るまで、あれこそ福島者よと、うしろ指さしてあざけつたが、おれはよくその恥辱にも堪へた。また藝州にて城に火を發したとき、おれは一番乗に駆けつけて、小書院の屋根にのぼつて、破風が燃えてもしりぞかず、つひに炎を消しとめて、最後に屋根から飛びおりたが、傷一つ負はなかつた。また亡主左衛門大夫殿、かくれなき酒亂にて、宴中ゆるぎなくしてひとを斬つたが、おれはその血刀を搔いくぐつて殿をおさへた。されば、なにものにもおくれをとらず、なものをも傷つけたおぼえなし。今、かの男、たしかにおれがかくまつた。この五郎左が相手をする。追手のめんめん、かかれ、かかれ。」

そのいきほひにおびえたか、あるひはすでに散り去つたあとか、飛びかかつて来るものは一人もなく、聲はちかくの川風に吹きながれて、夜ふけの闇はなほさら濃くあたりを塗りつぶした。

五郎左が爐端にもどつて來ると、かの男はしげしげと見あげて、

「おぬしのかくまひやうには、おれもあきれた。その刀もまた赤さびか。」

「うむ。」

「かくしごとは知らずと申されたな。」

「いかにも。」

「おぬしの胸にはなにも秘めてをらぬのか。胸中ただ清風の吹き抜けか。」

「清風に似たものは、胸中ふかく秘めてをる。」

「風のやうなものにしても、秘めたものは秘めたものだ。それでは、かくしごとは知らずとは申されまい。」

かくしておいて、かくさぬといふ。ウソいつはりに似るではないか。」

「ふかく秘めたものがあればこそ、ウソいつはりいはぬのだ。」

五郎左は火箸をとつて、灰の中の火を掻き立てながら、

「行け。もはや用はあるまい。」

「それがさ。」

ひげづらを撫でて、

「じつは、こまつたことがある。この座におちついてから氣がついたのだが、せつかくばくちで勝つた財布を途中でおとしたらしい。それがなくては、逃げるにもすぐさしつかへる。」

「おとしたのは、どのあたりだ。」

「その町角までは、たしかに懷中にあつた。當家に來るあひだの道か。」

五郎左はだまつて提燈をつけて、また外に出て行つたが、しばらくして、

「これか。」

もどつて来るなり、どさりと投げつけて、おこしかけの火のはうにむき直つた。

「かたじけない。」

男は財布を手につかんで、

「これで助かつた。いささか禮のしるし、小判一枚置いて行かう。」

「いらぬ。」

五郎左は火箸をもつて軽く男の手を打つた。財布が飛んで、男はあつとうつ伏した。總身がしびれたやうであつた。

「いらぬとあれば、せん方ない。おれが使ふまでのことだ。さらば。」

男は財布をひろつておきあがると、つい戸口のはう

に立つて行き、そこで猫のやうにふりかへつて、去りぎはの一言は、

「おれも浪人だ。浪人のふところは見すかしてゐる。

おぬしがふかく祕めたといふもの、讀めたぞ。ただの風ではなくて、嵐だらう。謀叛人だな。」

さういひすてるやいなや、男はおぢけづいたやうすで、一目散に逃げて行つた。

五郎左は背をむけたまま、

「南無……」

よく蒸れた土鍋のふたをとつた。

それから三日ほどたつと、さりげないおもむきで、五郎左は奉行所に呼び出された。白洲に控へると、奉行著座。

「なんぢ、謀叛のたくらみあるよし。ありていに申せ。」

たちまちあつかひが變つて、五郎左はきびしく縄う

たれた。

「おぼえ無い。」

「かたちにはあらはれずとも、ふかく秘めたものはあらうな。」

「たれの胸にもふかく秘めたものはあるはず。」

「餘人のことではない。なんぢのことをいへ。」

「なにをいへといふか。」

家さがしをして、見つけたものは具足一領、大太刀一振、小判十枚。

「この武具と小判は。」

「當然のたしなみ。」

「謀叛のための凶器、またそのための軍用金か。」

「ちがふ。」

「この小判、どこで盗んだ。」

「盗みははたらかぬ。」

「浪人が小判をもつてをれば、かならず盗んだものに

ほかならぬ。」

なほも身もとを洗つたが、うたがはしいものは出ない。

「いよいよ謀叛ときまつたぞ。」

「なにゆゑに。」

「證據をさがしても見つからぬといふのは、すなはちどこかに隠してゐるといふ證據にちがひない。いはねば牢問にかけるぞ。」

手をかへ品をかへ、痛め吟味をくりかへしても、痛さうな顔もしない。

「なんぢ、すでに謀叛のうたがひを受け、盜賊の汚名をかうむり、また牢問にまでかかつて、恥とおもはぬか。」

「恥は奉行の身にあらう。」

「だまれ。恥を知らぬやつ、腹切るすべも知るまい。」

「それこそ奉行のことだな。おれはひとの首も切らぬ

が、わが腹も切らぬ。」

「よくいつた。腹黒い申條、逆心うたがひなしと見えた。はらわたを吐かせて改めるにもおよばぬ。その素つ首、たちどころにぶちおとしてくれよう。」

すなはち、打首ときまつて、刑場に引き出される。

ときに、五郎左、大眼かつと見ひらいて、檢分役のめんめんをにらみわたしていふには、

「なんぢら、耳あらばよく聽け。おれの胸にふかく秘めた聲を、今こそはばからず、大鐘つき鳴らすごとくに唱へてきかせるぞ。これをば、この五郎左の聲とおもふな。これぞ天の聲よ。世を救はせたまふおん聲と聽け。なんぢら、無縁の逆徒、おどろき畏れよ。つつしめ。」

ものに憑かれたやうにさけぶのに、檢分役のめんめん、あわてて、

「こやつにむだごと吐かせるな。引き据ゑて、ただ斬

れ。」

首斬役、刀を振りあげれば、五郎左、いのちの瀬戸ぎはに、

「南無……」

振りおろす刀の下に、首は飛びながらも、高く唱へつづけた。

「さんたまりや。」

一説に、天草にきこえた千千岩五郎左衛門、かの宗門の一揆敗亡のをり討死とつたへられたが、じつはひそかに逃れて、世をしのんで生きのびたなれのはてがこの五郎左であつたといふ。しかし、これは寛永元年福島正則の死んだのち、あまり遠からぬころのはなしのやうにおもふ。さうとすれば、寛永十四年におこつた天草のいくさとは關係が無い。これを千千岩に擬するのは、後人の附會か。

